

平成三十年十月十日発行
皇學館論叢第五十一卷第五号 抜刷

『言海』における「もちゐる」

——大槻文彦と近世国学について——

兒
島
靖
倫

『言海』における「もちゐる」

——大槻文彦と近世国学について——

兒島靖倫

□ 要 旨

大槻文彦（一八四七—一九二八）が編んだ国語辞典『言海』に、近世国学の言語研究の成果が生かされていることは、先行の諸研究も資料による裏付けを以て指摘している。しかし、その注目している文献は、いずれも「本書編纂ノ大意」で示された文献ばかりである。事実、たとえば「もちゐる」（用）を詳細に解説した「凡例」（卅四）には、例証として八種の文献が本文と共に掲出されているが、これに関して先行研究は、ほとんどと言ってよいほど触れていない。したがって、『言海』における出典の調査考究には、再考の余地があると見える。

そこで本稿は、大槻以前の研究史上から『言海』を捉えることにして、「凡例」（卅四）における「もちゐる」（用）の出典を例に、近世国学の成果の取り入れ方について叙述した。結果として、学説の優先事項が問題にされると解釈できるところを指摘する。

□ キーワード

『言海』 「もちゐる」

榊原芳野

『俚言集覧』

辞書史

一. はじめに

本邦の辞書史を語るにおいて、大槻文彦（一八四七—一九二八）の存在を欠くことはできない。これは大槻が『日本言海』（以下、『言海』）の編纂により具現化した体裁が、近代以降の国語辞典の基盤になっているからである。^①

表1：「大意」に見られる諸文献

(三)	
和名鈔 新撰字鏡 類聚名義抄 下學集 和玉篇 節用集 合類節用集 伊呂波字類抄 和爾雅 會玉篇 名物六帖 雜字類編 東雅 日本釋名 冠辭考 和訓栞 物類稱呼 雅言集覽 語彙	

(四)	
和字正濫鈔 あゆひ抄 かざし抄 詞の玉緒 古言梯 詞の八衢 詞の通路 山口栞 活語指南	

その『言海』の「本書編纂ノ大意」（以下、「大意」）（三）および（四）

には、数多の文献が確認できる（表1）^②。これらの文献を大槻が大いに参照していることは、先行の諸研究も指摘している。近世国学の文献に焦点を当てると、たとえば湯浅茂雄（一九九五）は、『言海』と近世辞書との関係性について指摘し、これを後に発展させて特に『和訓栞』と『雅言集覽』との影響が強いことを見出している（湯浅（一九九七））。また、「大意」にない文献を取り上げたものとして、『言海』の語源説における『古事記伝』の存在について述べている（湯浅（一九九九））。これらを踏まえたものとしては、頃年において『和訓栞』との関係を説いた小野春菜（二〇一五・二〇一六）の他に、『雅言集覽』との関係を説いた内田久美子（二〇一六）の論があつて、やはり『言海』の形成過程に近世国学の影響が見られることを述べている。

諸々の研究が注目している「大意」の文献は様々であるが、いずれも

(三)の諸文献ばかりであり、(四)の諸文献にはほとんどと言って良いほど触れていない。したがって、何も『言海』に限ったことではなからうが、辞書史研究の基礎である出典の調査考究には、今も課題とすべき点が残っていると考えられる。なぜならば、辞書は先行の文献などを材料にして編纂される文献であるから、山田忠雄(一九八一)が言う「摸倣と創意と」を繰り返して作られていることになる。⁵⁾すなわち、一介の文献として『言海』の全体像を把握するためには、「大槻が『言海』を編纂するに際して、参照した文献はどのようなものか」について、再考する必要があると言えらる。

そこで本稿は、大槻以前の日本語学史上から『言海』を捉えることにして、本書の中に見られる近世国学の資料の記述内容から、その成果の取り入れ方について叙述することにする。

二. 『言海』の「用」に関する先行研究

『言海』の本文を見てみると、

もちゝゐる・キル・キレ・キ・キヨ(他動)(規四)一用一須一〔持ち、^キ以ル、ノ義、此語ノ語尾ノ變化ノ論、凡例ニ委シ〕

(二)用ニ立テムト動カス。ツカフ。モチフ。(二)務ニ就カシム。「人ヲ」任用 (三)可シトシ肯フ。「諫メ
ヲ」建白ヲ」採用

という語を立項している箇所がある。この他にも、

もちひ(名)一用一もちゐるニ同ジ。

もち・ふ・フル・フレ・ヒ・ヒヨ(他動)(規三)一用一もちゐるニ同ジ。

『言海』における「もちゐる」(兒島)

もちゆ(動)一用一もちゐるノ訛。

もちゐ(名)一用一モチキルコト。用ニ立ツルコト。

などを立項しているが、とりわけ「もちゐる」に詳細な説明を施し、他の四語は「もちゐる」に帰結するよう記述している。『言海』が歴史主義の立場を貫いていることを考慮すれば、大槻は「もちゐる」を最も古い語としていることになる。

さて、この「もちゐる」の「ゐ」に「此語ノ語尾ノ變化ノ論、凡例ニ委シ」とあるので、実際に「凡例」を見てみると、(卅四)に「もちゐる」についての解説がある。ここで大槻は「モチキル(用)トイフ動詞ハ、もち(持)トゐる(以)トノ熟語ナルコト、疑フベクモアラズ、サレバ、此書ニハ、其語尾ノ變化ヲ、ゐる、ゐれ、ゐ(規則動詞第四類)ノ方ニ定メタリ」と説明し、「抑モ、此語ノ語尾ニ就キテハ、語學家ノ間ニ、異説粉粉タレバ、今、煩ヲ憚ラズ、左ニ衆説ヲ拏ゲテ、其考拠ヲ述ブベシ」として、

『和字正濫鈔』二ノ廿四 『和訓栞』前編 『古言梯』 『古事記伝』十七ノ四 『山口栞』中ノ四十一

『増補雅言集覽』五十五ノ十四 『俚言集覽』 榊原芳野が説(『洋々社談』五十五號)

の八種の文献を本文と共に掲出している。いずれも近世国学の言語研究による成果のもので、これらを参考に「もちゐる、もちゐるトスル説、着着考證アリテ、動カスベカラザルガ如シ」とし、「もちゐる、つきゐる、ひきゐる等ノ語ハ、共ニ、其語尾ハ、ゐる、ゐれ、ゐ、ノ變化ナリ、ト斷定スベシ」と結論づけている。

この「凡例」(卅四)に見られる文献は、『古事記伝』『俚言集覽』『榊原芳野が説』の三種を除いて、全部が「大意」(三)および(四)で確認できる文献ばかりである。しかし、いずれも実際に『言海』でどのようにして扱っているのかは分からない。すなわち、学説の系統などを視野に入れるならば、『言海』の生成にはいまだ明らかでない部分

も多々あると思われる。

そのような中で、今野真二・小野春菜（二〇一八）が、『言海』の「もちゐる」について触れている。「本書編纂ノ大意」「凡例」から探る」という節（執筆は今野真二・小野春菜）において、「凡例」（卅四）を「この他の條は、その配置から二頁にまたがって記述される場合もあるが、それだけに（卅四）は例外といえる」（一七三頁）と言及し、これは、大槻文彦が明治十五年二月に『洋々社談』八十三号に発表した論考「モチキルという動詞の活用」と対応する部分が多い。そのため、大槻文彦が「凡例」を記述するに際して、採用したことが考えられる。……（卅四）には、明治二十年に出版された中島廣足増補の『増補雅言集覽』が採用されているため、本論考から加筆を行ない、「凡例」に組み入れたと推測される。

としている（同前）。この「モチキルという動詞の活用」に関しては、「明治期出版物と『言海』」という節（執筆は小野春菜）の註1にて詳しく述べている。それによると、この論文は『洋々社談』に掲載された榊原芳野の論考に触れた上で「この記述以降には、『俚言集覽』の見出し「もちゐる」における論証が引用されている」（三〇九頁）というこ
とで、

「凡例」（卅四）では、『俚言集覽』の引用箇所が「モチキルという動詞の活用」に比して減じており、「抑モ、此語ノ語尾ニ就キテハ、語學家ノ間ニ、異説粉粉タレバ、今、煩ヲ憚ラズ、左ニ衆説ヲ挙ゲテ、其考拠ヲ述ブベシ」とある。「衆説」として、『俚言集覽』において語釈を引用、あるいは書名などがあげられた『和字正濫鈔』『和訓栞』『古言梯』『古事記傳』の記述が、書名のみではなく、該当する語釈とともに引用されている。減じた引用箇所には、以上の四書が論拠としてあげられている。そのために、「凡例」（卅四）では『俚言集覽』からの引用箇所が減じたのではないかと推測する。

『言海』における「もちゐる」（兒島）

と説明する(同前)。つまり、「凡例」(卅四)は『俚言集覽』の構成を下敷きに、「モチキルという動詞の活用」を加筆して作成されたものというのである。

この推測それ自体は、おおよそ見当違いではなからうが、いささか疑問が残る。たとえば、『洋々社談』に掲載された榊原芳野の論考はどういうものか、「モチキルという動詞の活用」における結論は何か、減じた『俚言集覽』の引用箇所のようなものか、『山口栞』と『増補雅言集覽』はどこから引用したのか、これらの点について今野真二・小野春菜(二〇一八)は言及していない。本稿はこの点を考慮して論を進めてゆくことにする。なお、本稿は「モチキルという動詞の活用」を、便宜を図って大槻論攷と称する。

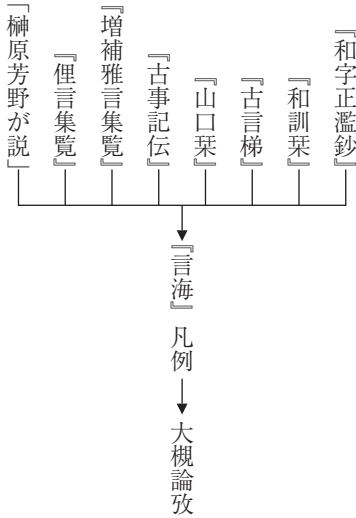
三. 大槻論攷の概要

大槻が『言海』を編纂し始めたのは明治八(一八七五)年で、刊行したのは明治二十二(一八八九)年から同二十四(一八九二)年の間であるから、十年以上の歳月を費やして編纂していることになる。その途中で『洋々社談』に発表したのが大槻論攷である。後に『復軒雜纂』(明治三十五年一〇月)に再録されたこの論文は、山田孝雄(一九三五)によると「これは「用ゐる」か「用ひる」かをはずきりさせねば、辭書に載せることも出来ないといふ必要から、遂にワ行上段活用といふことを學問的に證明されたもの」(七頁)ということである。すなわち、大槻論攷は『言海』の編纂における副産物ということになる。また、『復軒雜纂』は東洋文庫において復刻され、それを解説した鈴木広光(二〇〇二)は大槻論攷について「おそらくこの論文は『言海』凡例に記された考証をもとに、抜粋要約して読み物風にまとめられたものであろう。彼がひとつの動詞の帰属にこれだけこだわったのは、『言海』の動詞見出し語に

ついで、活用を指定して記載するためであった」(二九九頁)と述べている。

確かに両人が指摘するごとく、個々の語彙を取り出して各々の用法や意義について述べることは、辞書の受け持つ役割である。「もちゐる」というただ一個の動詞でも、それが文法上において他の動詞と異なる職能を有しているならば、辞書はそれについて記述しなければならぬであろう。大槻が「大意」(四)にて「辞書ハ、文法ノ規定ニ據リテ作ラルベキモノニシテ、辞書ト文法トハ、離ルベカラザルモノナリ」と述べているごとく、「凡例」(卅四)はもとより大槻論攷には、辞書と文法書とは一本の線で区切れない存在であるという思想が、顕著に表れていると考えられる。⁽⁸⁾

さて、鈴木広光(二〇〇二)の指摘は、「凡例」(卅四)があつて大槻論攷が書かれた」ということを前提としている。つまり、図式化して示せば、



ということになるわけであるが、これには少し無理があるように思われる。確かに大槻論攷の内容は、「凡例」(卅四)と共通する部分が所々に見える。が、この論文を三段落に分けると、今野真二・小野春菜(二〇一八)が指摘してい

『言海』における「もちゐる」(兒島)

表2：大槻論攷の構成

段落	文章	量
1	<p>新年の雑煮餅食ひつゝ、も……榊原ぬしの考への續篇として世に亡き靈を慰めむとす</p> <p>モチキ<small>（和字正濫鈔）</small>用モチキ<small>（注）</small>此假字いまだ慥なる證を勤かへず常にかやうにかけり是正字ならば、はたらく時モチウといふべし、キとウと五音の故なりモチユとはいふべからず<small>（愚案）</small>用の假字加茂谷川兩氏の著作并古言梯は契沖氏の説に従へり……扱又活用は和行にてモチキ、モチウ皆といふべし急居の訓ツキキなるをツキウと訓る例なり</p>	一頁分
2	<p>引用文 〔『俚言集覽』〕</p>	四頁半分
3	<p>地の文</p> <p>右の説洵によし但しモチとキルとを二語と定めたる上は……和行に中二段活用は無くモチキルツキキル、ヒキキル皆一段活用と斷定すべきなり</p>	一頁分

四、大槻論攷の記述内容

四・一、第一段落

論文の導入部に該当するこの部分にて、大槻は雑煮餅を食いつつ「もちひ」（餅）と「もちる」（用）との仮名遣について考えており、

此活用の事は、語學家の間に論ありて一定しがたかりしに、此洋々社談の某號に榊原芳野大人の瓣出で、より、我も人も争ふべくもなく思はれしに、その榊原大人も去年の極月の二日にはかなく身まかられて、今は此まど

ることく、その過半が『俚言集覽』における「もちる」の引用であり、大槻自身の意見は起首および末尾の僅かな文章のみである（表2）。この点から言えば、先に「凡例」（卅四）があり、これに依拠する形で大槻論攷があつたとは、いささか考えにくいと思われる。そこで、さらに進んで大槻論攷の内容を吟味する必要があるう。

るに睦びかたらふべくもなくなりしは、悲しともまた悲しきかぎりぞかし。此頃ゆくりなく、村田了阿の俚言集覽にも此活用の事委しく擧げて、いとゞその疑ひなきを知りたれば、榊原ぬしの考への続篇として、世に亡き靈を慰めむとす。

と述べる（傍線部および句読点は引用者による）。この文言から、大槻論攷は「榊原芳野が説」を發展させた論文であることが窺える。ちなみに、大槻と榊原との交流関係については、関根正直（一九二八）によると、

國學は明治八年から博士が文部省に奉職した頃、同僚に榊原芳野といふ國文學者があつて、机を並べてゐた所から、この人に種々益を請うたと博士の直話であつた。榊原は博識強記をもつて聞えた學者であつたが、明治十四年に歿し、その後は故黒川眞頼翁に問はれた。

ということである（七〇―七一頁）。大槻自身もまた、『言海』は元々「その初は、榊原芳野君とともに、編輯のおほせをかうむりたりしに、……」（『言海』「ことばのうみのおくがき」という計画であつたことを述べている。⁹）したがつて、ここで「榊原芳野が説」について検討する必要があるう。

さて、大槻が「凡例」（卅四）で「榊原芳野が説」としているのは、「用の字の活」という論文のことである。本稿は一貫して「榊原芳野が説」とする。この論文の内容を掻い摘んで簡条書きにすると、

①『古事記伝』で本居宣長が主張した「もちひもちふもちふると活用ハタケく言にて、戀強コヒシなどと同格の活きなり」という説を、「用を餅にいひかけたるは所謂ソウゴウ双關にして假借の音なること即あしひきの山居を病といひなし今やくをうまやくと通せしと同じ且假字の違なしともいひかたき時代乃歌なればかたくたしかなる證とは爲難し」と否定している。

②宣長説の反証として「中島萩原二氏の和行一段の語とは定められしなりさるを蜻蛉日記のもちあるへしやも

『言海』における「もちある」（兒島）

ちゐるまじやの一語にては信難しとて後世乃中二段に據れる書とも此頃はかつく見ゆれと彼の用ゐるの例は諸書に多し」と述べた後に、「我が一わたり見し書の中にも一段なる例證猶多し」として『宇治拾遺物語』『薰集類抄』『公事根源』『神皇正統記』『古本遍照發揮性靈集』に「もちゐる」の用例が存することを挙げてゐる。

③結果として「中古までは漢文を讀むにも用ひ用ゆなどの訛はなかりしと見えたり」としており、「其活用をしらんには上の書ともに足りなんかし」と述べてゐる。

というようになる。榊原もまた「もちゐる」が最も古い語であるとしており、「もちひ」や「もちゆ」は訛語であるとしてゐることから、やはり大槻の説に影響を与えていることが窺える。

四・二 第二段落

今野真二・小野春菜(二〇一八)が指摘することく、ここでは『俚言集覽』が立項している「もちゐる」の語釈が丸ごと引用されている。「村田了阿の」となつてゐるのは、まだ太田全斎を編者とする説が出る前だからである。その『俚言集覽』には、

モチキ〔和字正濫鈔〕用モチキ〔注〕此假字いまだ慥なる證を勸かへず常にかやうにかけり是正字ならば、はたらく時モチウといふべし、キとウと五音の故なりモチキといふべからず(愚案)用の假字加茂谷川両氏の著作并古言梯は契沖氏の説に従へり。唯本居氏の古事記傳云、用の假字は源仲正家集に元日戀、千代までも影をならべて逢見むと祝ふ鏡の用ひざらめや、夫木集^{卅二}に載れり。又後なれとも藤原經衡家集にも此同し人宇治殿にて餅ををこすとて肴には何もあれとも、此中に心につかば、是を用ゐよかし、君が代を心用ひのうれし

きはいかなる人の情なるらん（夫木集已下細字）と餅に云かけたるに依て定めつ、仲正は後撰集の作者なれば
いまだ假字の亂れざりしほどなり。もちもちふもちふると活用し言にて、戀強なと同格の活きなり、……

とあるごとく、「凡例」（卅四）に掲示された書名が確認できる（句読点は引用者による）。また、一部ではあるが、『古
言梯』のように書名のみで本文が掲載されていない記述も存する。したがって、大槻は最初から原典を閲覧していた
のでなく、『俚言集覽』から存在を知って本文を検索した可能性が考えられる。

一応『俚言集覽』も「凡例」（卅四）に掲げられている文献であるので、その内容について触れておくことにする。
『俚言集覽』は「モチキは持と以との二語にて一言にはあらず」と述べているごとく、「もちゐ」を単語でなく連語と
している。その例証として『日本書紀』（巻第二、神代下）を引用し、「是等、みな、用を毛知爲と、古くよりつかひ
たる意也、かくの如く、モチキは一語にあらず」と断言する。また、「本は佛書より出しなり」として、『佛説觀無量
壽佛經』『法華經信解品』『法苑珠林』を挙げて論じているほか、『韓非子』『佩文韻府』『周禮』『論語』『説苑』『國語』
なども引き合いに出している。

しかし、「もちゐ」の活用については結局「モチキモチウといふべし」とあるごとく、今日でいうワ行上二段とし、
その根拠に『日本書紀』（巻第五、崇神天皇）にある訓注「急居、此云二菟岐于二」を挙げている。大槻は「もちゐる」
の語源を「持チ、以ル、ノ義」としていることから、活用形に相違はあるが、『俚言集覽』の学説に影響を受けてい
ることが考えられるのである。

四・三 第三段落

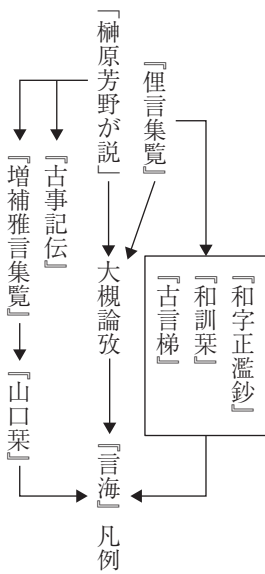
論文の終結部に該当するこの部分にて、大槻は「右の説洵によし」と『俚言集覽』を支持しながらも、「モチとキ
『言海』における「もちゐる」（兒島）

ルとを二語と定めたる上は終止の體は尚キルの活用に隨ひてモチキルとすべき」と述べ、「急居は日本紀に一處見えたるのみの活用にて後さらに見えず」として「急居を正しとすべくして後にはすべて音便にてもツキキルとのみ用ゐたり」とし、「和行に中二段活用は無くモチキルツキキルヒキキル皆一段活用と斷定すべきなり」と結論づける。中二段活用は今日でいう上二段活用のもので、本居春庭が『詞八衢』で分類した活用の一種である。

つまり、大槻が『俚言集覽』を引用したのは、「持ち」と「以る」との熟語」という学説それ自体はもとより、あくまで用例の量と所在表示という、その実証性に富んだ姿勢にあったのではなからうか。これは『雅言集覽』にも見られるが、『雅言集覽』は語釈が簡略であることから、学説を編み出しているとは言い難いと考えられる。

四・四・小括

確かに大槻論攷には、「此活用の事は語學家の間に論ありて一定しがたかりし」や「モチキルツキキルヒキキル皆一段活用と斷定すべきなり」など、「凡例」(卅四)と共通する部分が所々に見える。しかし、以上に見てきたごとく、ほとんどの記述は一致しないものばかりである。したがって、先に掲げた図式(三、大槻論攷の概要)ではなく、



という図式になるのではないか。これを証明するために、凡例(卅四)と共に大槻論攷の内容を吟味する必要がある。

五. 論攷と凡例との比較から見た「用」について

先にて述べたごとく、「凡例」(卅四)には本文と共に文献が引用されている。これを大槻論攷と比較すると、次のような表になり(表3)、このうち仮名遣と活用形のみを整理すると、次のようになる(表4)。全体を通して見ると、八種の文献に計十二種の学説がある。その中において大槻と同説は『山口栞』『増補雅言集覽』『榊原芳野が説』の三種のみであり、他は異説である。

表3: 『凡例』(卅四)と大槻論攷の比較

文献	仮名遣と活用形		記述内容	「凡例」(卅四)との異同	大槻論攷との関係
	『和字正濫鈔』	『和訓栞』			
『古事記伝』	もちひ↓もちふる	ハ行上二段	『源仲正家集』所収の歌の他に『藤原経衡家集』所収の歌を根拠にしているが、「もちふ↓もちふる」の根拠が示されていない。	なし	
『古言梯』	もちゐ↓もちう	ワ行上二段	魚彦は契沖と同説。 春海は俊頼の歌を根拠にしている。	実際に引用されているのは初版本以降のもので、「春云」が「村田春海云」と表記されている。	
『和字正濫鈔』	もちゐ↓もちう	ワ行上二段	「実語に用ゐたるハ……」とあることから、ワ行上二段を規範としているが、「以将の義なるべし」とする根拠はもとより活用形の根拠を示していない。	次の文が表記されていない。 「庸も用也と注せり」 「助語辭に所以を所用と訓するもありといへり」	『俚言集覽』の中に登場するが、『和字正濫鈔』と『古事記伝』以外は本文が掲示されていない。
『和訓栞』	もちひ↓もちふ	ハ行上二段	「一説」として示しており、根拠して『藤原経衡集』を引いているが、活用それ自体の根拠がない。		

『言海』における「もちゐる」(兒島)

文献	仮名遣と活用形		記述内容	「凡例」(卅四)との異同	大槻論攷との関係
『山口栞』	もちゐ↓もちゐる	ワ行上一段	宣長の説を示しながらも、写本における字句の異同に注意して、『蜻蛉日記』に「もちゐるべし」や「もちゐるまじ」があり、『源氏物語』(夕霧)に「もちゐる人」があることを反証としている。	なし	一切触れていない。
『増補雅言集覽』	もちい↓もちいる	ヤ行上一段	『古事記伝』と『俊賴集』(散木奇歌集)とを根拠に挙げている。 義門と同様『蜻蛉日記』を根拠として引いているが、「ゐる」でなく「いる」としている。	なし	一切触れていない。
『俚言集覽』	もちい↓もちゆ	ヤ行上一段	『新撰字鏡』(ただし『群書類従』の孫引き)や『大同類聚法』を例証にしているが、疑問を残す。	なし	一切触れていない。
『俚言集覽』	もちゐ↓もちゐる	ワ行上一段	『源氏物語』(蜻蛉)を根拠としており、『山口栞』を挙げている。	『源氏物語』(夕霧)が表記されていない。	一切触れていない。
『神原芳野が説』	もちゐ↓もちゐる	ワ行上一段	『古事記伝』の「もちふ」説を否定、反証として『宇治拾遺物語』(唐綾)や『薫集類抄』などを挙げて「用ひ」「用う」「用ゆ」などを訛語としている。	なし	導入部で触れているが、それ以上のことには触れていない。
『俚言集覽』	もちゐ↓もちう	ワ行上一段	「もちゐ」を単語でなく「もち」と「ゐ」との連語としており、その傍証として『日本書紀』を中心に、いくつかの仏書を挙げているが、結果として「急售」の訓を根拠にしている。	次の文が表記されていない。 〔和字正監鈔〕用、モチキ、……本居氏の此假字いか、あるべきいかんとなれば「モチキル俗に食事を用キル」と云〔韓非子外儲説〕……	論攷に引用されており、過半を占めている。

〔凡例〕

- 「仮名遣と活用形」欄は各々の文献が示している説を整理した。なお、活用の名称は現代のものに拠る。
- 「記述内容」欄は「仮名遣と活用形」の根拠などを表記した。
- 「凡例」(卅四)との異同欄は実際の記述との相違などを示した。
- 「大槻論攷との関係」欄は論攷での扱いなどを示した。

表4：諸文献の活用

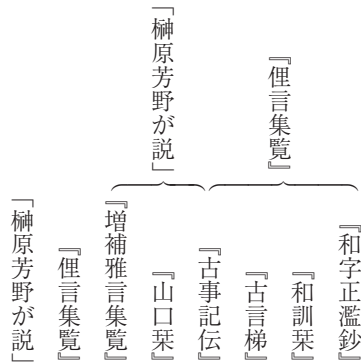
活用		ハ	行	ヤ	ワ
上二段	上一段				
〔和訓栞〕 〔古事記伝〕 〔増補雅言集覧〕					
	〔増補雅言集覧〕				
		〔山口栞〕 〔増補雅言集覧〕 〔榊原芳野が説〕			
		〔和字正濫鈔〕 〔和訓栞〕 〔古言梯〕 〔俚言集覧〕			

記伝』の説の反証として「中島萩原二氏の和行一段の語とは定められしなりざるを蜻蛉日記のもちゐるへしやもちゐるまじやの一語にては信難しとて後世乃中二段に據れる書とも此頃はかつく見ゆれと彼の用ゐるの例は諸書に多し」と述べていると指摘した。萩原の著述は不明であるが、中島の場合^①は『増補雅言集覧』に『蜻蛉日記』の存在が確認でき、そこに「もちゐるへしやもちゐるまじや」の文もあることから、榊原が触れているのは『増補雅言集覧』であると考えられる。その『増補雅言集覧』の「もちゐる」の語釈には、『山口栞』が確認できる。

『言海』における「もちゐる」(兒島)

さて、「凡例」(卅四)は『和字正濫鈔』『和訓栞』『古言梯』『古事記伝』『山口栞』『増補雅言集覧』『俚言集覧』『榊原芳野が説』の順番となっている。このうち『和字正濫鈔』から『古事記伝』までの四種は、先の引用(四・二・第二段落)で示したように、『俚言集覧』の「もちゐる」と同じ排列である。とりわけ『古事記伝』は、『榊原芳野が説』にも引用されている。また、先ほど箇条書き(四・一・第一段落)で、榊原が『古事

これらのような事例から、



という図式ができる。つまり、大槻論攷と「凡例」(卅四)に異同が見られるのは、すでに文献の書名が見られるからであり、単なる部分引用ではないことになる。したがって、「凡例」(卅四)は大槻論攷を基盤として成り立っていることになりうるであろう。

六. おわりに

以上、「凡例」(卅四)における出典について、大槻論攷と比較しながら検討を行ってきた。ここで最後に、本稿で確認したこと整理する。

第一に、「凡例」(卅四)は大槻論攷が基盤となっていることが確実となった。その大槻論攷は、「神原芳野が説」

を根本としていることから、『言海』の「もちゐる」は榊原芳野の学説に強い影響を受けていることが、新たに指摘できる。

第二に、『言海』には『俚言集覧』の影響が見られる。これまで江戸期の辞書との関係については、『和訓栞』や『雅言集覧』などの影響が指摘されてきた一方で、『俚言集覧』についてはあまり触れられてこなかった観がある。とりわけ使用例を充実させるという点においては、湯浅茂雄（一九九七）や内田久美子（二〇一六）らの調査から、『雅言集覧』を大いに参照しているとされてきた。しかし、「凡例」（卅四）および大槻論攷の記述から、少なからず『俚言集覧』の影響が『言海』に見られると考えられる。細かな点は今後の研究を俟たねばならないであろう。

第三に、『言海』の考証の過程においては、新資料の載録が見られる。新たな資料に基づいて検討を加える姿勢は、山田忠雄（一九八二）が『大言海』の特徴として指摘したものであるが、「凡例」（卅四）および大槻論攷から、それは『言海』を編纂していた当初からのものと考えられるのである。このことは、関根正直（一九二八）が大槻を「進歩的學者であつた」（七一頁）と述べる所以となると思われる。

以上を総括すれば、『言海』の「もちゐる」における出典の扱いには、「すべて、前人の説を取り、その事を言はずして、我が著作に記すは、剽竊なり。何書何人の説なること挙げずはあるべからず」（『大言海』「本書編纂に當りて」という言及に見られるごとく、学説の優先事項が問題にされていると解釈できる。これは湯浅茂雄（一九九七・一九九九）が指摘しているごとく、語源欄の記述における問題であるが、実際は語源欄の記述以外にも及んでいたと言える。すなわち、『大言海』の一大特色である語源はもとより、見出し語の仮名遣や文法事項などにも気が配られていたのである。このことは、大槻の編纂姿勢として特筆できると考えられると同時に、後の『大言海』に連なるものと理解される。

ところで、今回は『言海』の編纂史に関する一考察であるが、課題とすべき点も多い。たとえば「今回において扱った文献を、大槻がどのような経緯で閲覧したか」という問題がある。その一例として『古言梯』に焦点を当てると、そこには「村田春海云……」とある。これは初版本以降の諸本（再考本、増補標柱本、縮刷本、山田常典本）の頭注にある「春云」のことである。¹² 原典が「春云」であるのに、『言海』で「村田春海云」となっているのは、『言海』が辞書であるがために、分かりやすくした結果と言える。一方、書名は『古言梯』と表記していながら、実際の引用は諸本のいずれかであるという点は、大槻に榊原以外の国学者と交流があったことを考慮するにしても、¹³ 現段階においては資料による裏付けが困難である。これは今後の課題としていきたい。

【注】

(1) 「大意」(二)には、「五種ノ解」として「發音」「語別」「語原」「語釋」「出典」が掲げられており、これらの特徴が「国語辞書の近代性」とされている。これら一つ一つの特徴は、小野正弘(二〇一一)が指摘することく、『言海』以前の辞書にも見られるものであり、『言海』が新しく作り出したものではないが、全ての特徴を兼ね備えた辞書は『言海』以前に見られない。『言海』が今日においてもなお高い評価を得ているのは、この点に存すると考えられる。

(2) 『語彙』について大槻は、「語彙ハ阿、伊、宇、衣ノ部ニ止ル、惜ムベシ」としか触れていないため、これらの中に入れるか否かは意見が分かれる。しかし、山田忠雄(一九六七・一九八一)、古田東朔(一九六九)、犬飼守薫(一九九九)らの調査を考慮すれば、『語彙』は『言海』に少なからず影響を与えていると考えられるから、加えても一向に差し支えないと思われる。

(3) ここでは『本草綱目啓蒙』における「いるか」(海豚)の記述のみを事例に比較している。この他に『和漢三才図会』『貞丈雑記』『箋注倭名類聚抄』の名もあるが、仔細な考察までには行き届いていない。後に湯浅茂雄(一九九七)は、これらの文献の影響について、少なからず語釈で参照していることを指摘している。

(4) このような視点は、池田証寿(一九九四)や大槻信(二〇〇五)らの調査があるごとく、古辞書に注目されがちであることが多々あるが、すでに見坊豪紀(一九七七)や犬飼守薫(一九九九)らの調査が存するごとく、たとい近現代の辞書類に置き換えて論じても、一向に差し支えないと考えられる。

(5) この「摸倣と創意」となる要素は、今野真二(二〇一一)が「鳥瞰的にみれば、『摸倣』とは『変わらず受け継がれる』ということで、『創造』とは『変わる』ということ」(二四頁)と説明するごとく、辞書の系譜に深く関係すると考えられる。すなわち、辞書史は山東功(二〇一七)が「単なる辞書採録語彙の変遷史に留まらず、当時の言語意識の反映ともみなされうるし、さらには辞書編纂に関わる思想・精神的展開ともみなすこともできる」(二五頁)と述べるごとく、文献それ自体の特徴の検討のみならず、編纂法から見た言語意識の一面を知り、また辞書観についても考えることが可能と言える。

(6) たとえば「凡例」(五十一)に「同一ノ語ナレドモ、古今ニ因リテ意ノ移レルアリ、所用ニ因リテ義ノ變ズルアリ、此類ハ、一(一)(二)(三)(四)(五)等ノ標ヲ以テ區別セリ、而シテ、其次第ハ、古義ヲ先トシ、今義ヲ後トシ、或ハ正義ヲ前ニ掲ゲ、転義、訛義等ヲ末ニ置ケリ」とある。このような記述法および姿勢は、『広辞苑』や『日本国語大辞典』などの語釈に見られる。今日において広く行き渡っている観があるようであるが、犬飼守薫(一九九九)が指摘するごとく、当時としては先端であったと言えよう。

(7) 『山口栞』を引用した箇所最後に、「尚、活語雑話三篇ノ末ニモ用ゐるニ断定シタル文アリ」とある。しかし、その記述内容は、『活語雑話』の出版事情に関係するものが主であるため、本稿においては措くことにする。

(8) この点に関しては、『語法指南』や『広日本文典』(明治三〇年一月)などの記述についても触れる必要があるが、これについては稿を改めて述べることにする。

(9) 大槻は「西洋文法を段々學んでから、遂に日本文法を作らうと思ひ立つて、そこで獨學で國學をも始めた」(大槻文彦(一九二八)四三頁)と述べるが、榊原との交流から近世国文学の影響を指摘できると考えられる。このことは古田東朔(一九八八)も指摘しているが、榊原が一体どこまで関係しているかは分からない。

『言海』における「もちゐる」(兒島)

(10) 沖森卓也編(二〇〇八)によると、「国語学書目解題」(一九〇二)や関根正直(一九三五)によって、編者を村田了阿とする誤りが訂正された。春風館本『諺苑』(二七九七、天理大学蔵)の凡例や項目が本書に含まれることから、全齋編とされるようになった(八八頁、項目執筆は木村義之)ということである。しかし、『大言海』にて「凡例」(卅四)の訂正は一切されていないことから、定着するのは大槻の没後以降と考えられる。

(11) 国語調査委員会編(一九二二)でも採り上げられているが、『心のたね』(下の巻、二九丁裏)に、

もちふるもちふるとある詞は、『古事記傳』に餅モモチにひひかけたる歌をひきていはれたる事ありて、定まれるが如くなれども、もちある・もちぬれと活きたる例あれば、猶いかゝあらん。そのうへ、いひかけの句は、洗アふを荒鶉アラツにかけたる歌などもありて、下の活きのもじまでをば、思はぬさまざまれば、かたぐこの活とは定めがたし。案オモツに、これは以モチと率キと二ッ合せたる詞にて活きは一段の格なるべし。

とある(本稿では国立国会図書館デジタルコレクション〈書誌ID000000920708〉を使用)。榊原が指摘することく、「もちある」をワ行上一段とし、単語ではなく連語としていことから、可能性は否めない。また、『古事記傳』の説に疑問を呈するなど、「榊原芳野が説」との共通部分が見られる。その反証として「もちある」の活用例が挙げられていないことから、「榊原芳野が説」は萩原の説を発展させたものであると考えられる。

(12) 諸本の名称は日本語学会編(二〇一八)の「古言梯」(項目執筆は林義雄)による。

(13) たとえば小中村清矩の日記(明治二十一年三月付)に、
十日 陰、午後晴。

大学出、漢書生二歴史、和文生二敏達紀を授く。午後一時永田丁鍋島邸行。かなの会相談也。会長高崎及び有住・内田(嘉)・井上(頼)・大槻・阿部・物集・橘(良平)・副島(唯一)・植松・木村・清水・元田其他の評議方数人來ル。

(大沼宜規(二〇一〇)二三三四頁)

という記述が確認できる。また、寛五百里(一九二八)が関根正直から聞いた話によれば、

博士は、眞頼翁の文法に關する知識の豊富なのにいたく心を引きつけられてゐた様であつた。しかしそれは眞頼翁の糟粕を嘗めようためではなく、寧ろ博士独自の體系の中へ眞頼翁の知識を材料として撰取しようためであつた。眞頼翁が「これは將然言だ、これは連用言だ、終止言であることは昔から定まつてゐる」と、「八また」式文法を頭からきめてか、つたに反して、博士は、將然前提法だの、直說法だのと、西洋文典の組織をふりまはしたものであつた。

としたということであるから（七九頁）、遠藤佳那子（二〇一六・二〇一七）などが指摘することく、大槻の文法理論に黒川真頼が影響を与えていることが考えられる。

【使用テキスト】

● 大槻文彦 『日本辞書言海』（全四冊、明治三二年五月～二四年四月、私版）

※ 引用は『明治期国語辞書大系』（平成一〇年四月、大空社）所収の影印に拠るが、合略仮名や変体仮名は全て普通仮名に改めて表記した。

● 大槻文彦 『大言海』（全四卷、昭和七年一〇月～一〇年九月、富山房）

● 大槻文彦 『モチキルといふ動詞の活用』（『洋々社談』第八三号、明治一五年二月）

※ 引用は『復軒雜纂』（明治三五年一〇月、広文堂）に拠る。

● 村田了阿 『俚言集覽』（明治三二年～三三年）

※ 引用は複製本（下巻、平成一〇年四月、名書刊行会）に拠る。

● 榊原芳野 『用の字の活』（『洋々社談』第五五号、明治二二年六月）

※ 変体仮名は全て普通仮名に改めて表記した。

『言海』における「もちゐる」（兒島）

【参考文献】

- 池田証寿（一九九四）「類聚名義抄の出典研究の現段階」『信州大学人文学部人文科学論集』第二八号
- 犬飼守薫（一九九九）『近代国語辞書編纂史の基礎的研究——「大言海」への道——』風間書房
- 内田久美子（二〇一六）『「言海」と先行辞書について——「雅言集覽」を中心に——』『清泉語文』第五号
- 遠藤佳那子（二〇一六）『黒川真頼の活用研究と草稿「語学雑図」』『日本語の研究』第十二卷二号
- ——（二〇一七）『黒川真頼における「詞八衢」の受容と展開』『国語と国文学』第九十四卷七号
- 大槻文彦（一九二八）『大槻博士自傳』『国語と国文学』第五卷七号
- 大槻信（二〇〇五）『辞書と材料—和訓の収集—』『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院
- 大沼宜規（二〇一〇）『小中村清矩日記』汲古書院
- 沖森卓也編（二〇〇八）『図説 日本の辞書』おうふう
- 小野春菜（二〇一五）『倭訓栞』後編からみた『言海』について』『鈴屋学会報』第三二号
- ——（二〇一六）『和訓栞』と『言海』の語義記述について』『まなびの栞』第五号
- 小野正弘（二〇一一）『国語辞書史上における「言海」の位置——一関市博物館編「ことばの海」』
- 笥五百里（一九二八）『大槻博士傳補遺』『国語と国文学』第五卷七号
- 見坊豪紀（一九七七）『日本語の辞書(2)』岩波講座 日本語 第九卷、岩波書店
- 国語調査委員会編（一九二二）『疑問仮名遣』前編、国定教科書共同販売所
- 今野真二（二〇一一）『漢語辞書論攷』港の人
- 今野真二・小野春菜（二〇一八）『言海の研究』武蔵野書院
- 山東功（二〇一七）『近代国語辞書と文法——官版 語彙 をめぐって——』『国語国文』第八六卷三号
- 鈴木広光（二〇〇二）『解説』『復軒雑纂——国語学・国語国字問題編——』東洋文庫、平凡社
- 関根正直（一九二八）『大槻博士を憶ふ』『国語と国文学』第五卷七号

■ 日本語学会編（二〇一八）『日本語学大辞典』東京堂出版

■ 古田東朔（一九六九）「大槻文彦伝（三）」『文法』第一巻九号、明治書院

■ （一九八八）「海」へ注いだ流れの一つ——『小学読本』と『言海』——北海道大学文学部国語学講座編『北大国語学

講座二十周年記念論集 辞書・音義

■ 山田忠雄（一九六七）『三代の辞書——国語辞書百年小史——』三省堂

■ （一九八一）『近代国語辞書の歩み——その模倣と創意と——』上・下巻、三省堂

■ 山田孝雄（一九三五）『國語學史上より見たる大槻先生』『國漢』第一七号、富山房

■ 湯浅茂雄（一九九五）『江戸時代の辞書』西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』世界思想社

■ （一九九七）『言海』と近世辞書』『国語学』第一八八集

■ （一九九九）『言海』『大言海』語源説と宣長『古事記伝』『実践国文学』第五五巻

〔付記〕 本稿は、第三十五回鈴屋学会大会（於 本居宣長記念館、平成三十年四月二十二日）にて「大槻文彦と近世国学——もち

ある」に見られる出典の扱いについて——と題した口頭発表の内容を基として、若干の加筆修正を施したものである。席上および発表前後において、数多の方々より有益な御教示・御指摘を賜った。とりわけ大島信生先生、齋藤平先生、田中康二先生、千葉真也先生、小野春菜先生らの御高見に負うところが大きい。特に小野春菜先生は、『言海の研究』の「本書編纂ノ大意」「凡例」から探る」という節の註¹で鈴屋学会大会の口頭発表を取り上げ、「凡例」（卅四）と各引用書と対照を行った結果、『古言梯』については、『古言梯再考増補標注』からの引用であることが明らかにされている」（一八三頁）と言及している。この『古言梯』については、諸本の関係から課題とすべき点が多く残っているが、今後の自分の研究課題となるであろう可能性を見出すことができた。ここに特記して深く謝意を表します。

（こじま やすのり・皇學館大学大学院博士後期課程一年）

『言海』における「もちある」（兒島）